

『資本論』と格闘すると長生する」という言葉に誘われて

\* 明治十八年三月十四日。

本来この日付は西暦で表すのが正しのである。一八八三年三月十四日と書かなければならぬ。なぜなら「この日」は知の巨人である、かのカール・マルクスの没した日であるからだ。しかし、和暦で書いてみると「相当遠い過去の人」という感覚が、祖父の位置まで近づいて来るような気がするの面白い。マルクスが没した前日、高村幸太郎が生まれている。有名な「僕のまえない道はない、僕の後に道ができる」(「道程」一九二〇年・大正三年作)という詩まで、因縁的に思えて、(そ

んなことはありえないのだが)マルクスの怒涛の生涯をたたえているかのように聞こえてくるから不思議である。

僕の前に道はない

僕の後ろに道は出来る

父よ

僕を一人立ちさせた広大な父よ

僕から目を離さないで守る事をせよ

常に父の気魄を僕に充たせよ

この遠い道程のため

この遠い道程のため

マルクスの没年は六十四歳であるから、今の私より十歳も若い。「人生わずか五十年」と言われていた江戸時代を思えば、時代による制約であるかもしれないが、「資本論」第一巻の完成度を高めて出版し、第二部、第三部、そして第四部とも

いわれる「剰余価値学説史」までの、残された膨大な手書きの原稿（草稿）の到達度を見ると、その完成度が「もうひと息」というところまでさしかかっていたのであるから、まことに惜しいことである。エンゲルスはマルクスの死について「今、人類は頭ひとつたりなくなつた、われわれの時代でもっとも非凡だつた頭のひとつ」書いて嘆いた手紙をアメリカの同志に書き送っている。

＊『資本論』と格闘すると長生きができる？

私が「資本論」を買つたのは一九五八年、電気店に勤めながら夜間高校に通つていた十九歳の時である。なぜその本を買うことになつたのかといえは、通つていた夜間高校で会うことになつた、今すでは故人になつてしまつた吉村金之助氏、小野寺慶吾氏らの「情熱的活動」の影響である。

購入した小さな文庫版の「資本論」は長谷部文雄訳のもので、最近の訳本よりはるかに難しく、なかなか読み進むことが出来なかつたことを記憶している。この本は第一分冊を購入しただけで、のちに出版された赤い表紙の大日文庫版で全巻をそろえたのは三十代になつてからである。いかに遅々として、読み進むことが困難であつたかがわかる。

時がたつて六十代になり、「目の黒い内に『資本論』をすべて読破したいものだ」と思つていたところ、資本論学習運動の先輩である嶋田誠三氏から『資本論』に取り組むと長生きができる」と強く勧められ、仕事は多忙を極めていたのであるが、前橋の協立病院や診療所を会場にして行われていた「群馬資本論を読む会」に参加することになった。参加してみても「長生きする」の真偽はともかく、一人で読み進めるより集団で議論できるということとは、多くの刺激と収穫もあつて、次

第にのめりこみ、気付くといつのまにか常連になつてしまつていた。

おまけにそれでは足りずに、三年ほど前から首都大学東京の宮川彰教授を講師とする「埼玉資本論講座」と東京学習会議主催の「資本論草稿講座」に月一回のペースで通うことになつてしまつた。これも嶋田誠三氏の言葉『「資本論」の学習は優れた先達を必要とする』ということに魅かれたためである、この名言は、まちがいはなくその通りであつた。

一九六〇年代に活発に展開された労働者学習運動、なかでも「資本論学習運動」の開拓者であつた宮川実教授の偉業を継承して、熱く「資本論」の神髄を語る宮川彰教授の講義は、二十代から始まつた私の「資本論」学習での疑問を次から次へと深く解明してくれるのである。こうなると、完全にもう「資本論」のとりことなつてしまつたようである。

### \* たつた十一人による葬儀

最近の「赤旗」に載る訃報欄をみると、「葬儀は近親者すませました」というものが多いように感じる。どんな人間にとつても「死」という事柄は避けることの出来ないものであるから、「その瞬間」とそれに伴う儀式と最終的埋葬をどうするかということは避けては通れないことではある。詩人の茨木のりこのように、生前に「お氣遣いなく」と手紙を書いて別れを告げてしまふというのも潔い方法ではあるが、凡庸なるものとしては考えるのがめんどうで、後送りしてしまう。「葬儀とはなんのためのものか」ということも話題になり、「子どもたちに余分な負担はかけたくないから密葬で」とか場合によつては残された妻子が困るような希望を遺言したという話も聞くが、私としては「葬儀とは残されたもののために行うもの

だ」という考えをあえて披瀝し、結局は「いまは、  
 なにも考えたくはない」というのが本心である。  
 フランシス・ウイーン著・田口俊樹訳「カール・  
 マルクスの生涯」(朝日新聞社刊二〇〇二年九月)  
 によると、マルクスの死の瞬間は次のようなもの  
 であったという。

「三月一四日(水曜日)、いつもの時刻午後二  
 時半にエンゲルスが見舞うと、ヘレーネ・デムー  
 トが出てきて、マルクスは今、暖炉の脇に置いた  
 お気に入りの肘掛け椅子に座って『半分眠ってい  
 る』という、そして二人が寝室にはいったその一  
 分か二分後、マルクスは息を引き取る。」まさに、  
 だれもが理想とする「大往生」である。しかも、  
 マルクスはずっと「肘掛け椅子」に座っていたわ  
 けではなく、妻に十五カ月前に先立たれ、さらに  
 二か月まえに娘、イエニツヒエンがガンで急逝と  
 いう状況の中、「資本論」の草稿を書き続けてい、  
 没年には、「小止ない彷徨」(アルジェ、モンテカ

ルロ、アルジャントウイユ、スイスと飛び回って  
 いる)をしていることを考えると、さもありなん  
 である。

#### \*子孫に美田を残すなということ

インターネット上には様々な情報がとびかっ  
 ている。感心させられる情報もあれば、「ガセネ  
 タ」の類もまた闊歩しているエリアでもある。「子  
 孫に美田に残すな」というキーワードで検索をか  
 けてみると、この「故事」の語源は、中国の老子  
 にあるとする見解と、西郷隆盛が大久保利通にあ  
 った「偶成」という七言絶句にあるという説が見  
 つかる。どちらも「ガセネタ」ではなからうが、  
 大元はたぶん老子にあるであろうが、情報の多さ  
 の点では「西郷隆盛説」に軍配があがる。あるホ  
 ームページに紹介されている西郷隆盛の「七言絶  
 句」とその口語訳は次のようなものである。

吾家遺法人知否 不爲兒孫買美田

(我が家の遺法、人知るや否や、兒孫のために美田を買はず)

「現代の貧困」の中で、どれほど「美田」を買うことの出来る人がいるのかと思うが、時々起る骨肉の相続争いの新聞記事を見ると、やはり「だから美田はいらない！」と見栄を張りたくなる。

「さうどうの貧困」で知られていたマルクスの「遺産」は、前掲の「カール・マルクスの生涯」によると、「カール・マルクスは国籍もなく、遺言もなく死んだ、彼の遺産は二百五十ポンドと査定された。メイランド・パーク・ロード四一番地に残された家具と書籍の代価がその額の大半をしめる。それらは膨大な手紙と手帳とともにすべてエンゲルスに預けられ、ヘレーネ・デムートも、一八九〇年十一月四日に腸のガンで亡くなる

まで、リージェント・パーク・ロード一二二番地の彼の家に女中として雇われる」

二五〇ポンドは、今日のレートでいうと一ポンド一五四円前後、単純計算でいえば三万八千五百円程度である。現在と明治時代の物価指数を換算するのは難しいが、仮に百倍としても、その貨幣価値はたかがしれている。

しかし、マルクスの最大・最高の遺産は「膨大な手紙と手帳」である。それらがエンゲルスの手にゆだねられたおかげで、「資本論第一部」「資本論第三部」「剰余価値学説史」をはじめとする膨大な科学的経済学探求の書を我々が読むことが出来るのである。まさに「巨大な知の遺産」である。

#### \* マルクスと日本

「資本論」には様々な「楽しみ方」が満載され

ている。しかもそれらは一般的な意味で「面白い」というものではなく、今日の日本の諸問題を考えるうえでも、多大な援助を与えられるという「論理的・科学的な面白さ」である。その「楽しみ方」の一つに、「マルクスの日本への関心」という問題がある。調べてみると、数は多くはないが日本に言及した部分の意味と内容には興味をそそられる。

「資本論」に書かれている日本についての言及は、注意深く読んでみると、単なる好奇心で日本を注視していたのではなく、マルクスの生涯の研究テーマの中にしつかりと位置付けられていたことがわかる。「マルクスの晩年、日本はどのような時代であったか」、「マルクスは、どのような状況の日本を知りえたか」をイメージ的につかむために次掲の「年表」(後述の「手紙」の中に紹介する)を作成してみた。

そこからわかることは、マルクスの晩年、日

本は封建制度の崩壊から資本主義への移行期にあったということである。したがって、「資本論」に登場する「日本」は、「絶対主義」を研究する部分で登場する。その他の部での「日本」でも、「なぜここに日本が登場したのか」という問題意識を持って読むことが必要な気がした。マルクスが「移行期の日本」をどのように見たのかを探るため、しばらく格闘する必要があるであろう。

『「資本論」と格闘すると長生き」という嶋田命題の証明はまだ難しいが、次々にわいてくる好奇心と学ぶことへの意欲がわくこと、それが生き方にも影響を与えることは確かである。「元気でいられるから東京の学習会へ行くことが出来る」のか、はたまた「学習会に行くことが出来るのだから元気なのか」判断は微妙であるが、興味ある課題がやすむことなく湧いてくるということだけは確実である。

先日は東京学習会議の中心メンバーの一人か

ら『資本論』学習は独りよがりですら終わってはないのではないか」という厳しい問題提起と「若者が『資本論カクサン部』をつくりたいといっているのもてるIT技術で助力してほしい」とたのまれた。どうやら「いわゆる後期高齢者」にさしかつか今から、『資本論』に強力に引っ張られて行く人生になりそうである。

### \* 「小ずるい日本と『資本論』」

今年の三月、「前橋資本論講座」塾長である菊池貞則氏から次のようなはがきを頂戴した。

「資本論学習会ごころうさんです。この次は上京し出られないかも知れません。実はお伺いしたいことがあるのですが、マルクスがチョコツと日本を書いているといいますがどこに、お教えください。日本資本主義の小ずるさ戦前から傾向がありますが、これがまたまた世界にわかって来ていま

す。反日運動がここかしこでおこるのは無理ないとおもいます。」

ハガキを頂いた時、ちょうど仕事中に痛めた腰痛が厳しくなり、近所の接骨院に連日通い、治ったと思ったら「記録的猛暑」がスタート、私の「調査」があまり進まぬまま多忙な日常業務をこなしているうちに九月を迎えました。あまりにも長い時間、お返事が書けなかつたので、今日、途中経過を書くことにした。以下はその返信の文面である。

菊池先生

過日には、丁重なおはがきを頂き、すぐ御返事をお思っていたのですが、ふとした動作が原因で腰痛が発生し、しばらく格闘していたところ、「記録的猛暑」に突入してしまつたため、きわめて多

忙な毎日となり、書きかけのままでしたので、お返事がおくれて申し訳ありませんでした。とりあえず、わかったことだけご報告させていただきま  
す。

まず、「マルクスと日本」を考える場合、なにより時代のすり合わせが肝要と思ひ、簡単な確認用の年表を書いてみました。マルクスの晩年（一八八八年五月五日〜一八八三年三月一四日）、日本は封建制最後の徳川幕府が崩壊し、「絶対主義的天皇制」が徐々に確立し始めた時代であったことが再確認できます。



- 一八〇〇年（寛政一二年） 伊能忠敬 蝦夷地を測量  
一八〇四年（文化元年） ロシア使節レザノフが長崎来航  
一八〇八年（文化五年） 間宮林蔵が樺太探検  
一八二一年（文政四年） 伊能忠敬「大日本沿海興地全図」完成  
一八二八年（文政一一年） シーボルト事件  
一八三三年（天保四年） 天保の飢饉  
一八三七（天保八年） 大塩平八郎の乱  
一八三九年（天保一〇年） アメリカ商船モリソン号打ち払う  
一八四〇年（天保一一年） 渡辺崋山、高野長英らが処刑される（蛮社の獄）  
一八四六年（弘化三年） アヘン戦争  
一八四八年（弘化六年） 米国よりピッドルが浦賀来航、通商を求める  
一八五三年（嘉永六年） **共産党宣言出版**  
米国使節ペリーが浦賀に来航、通商を求める。  
ロシア使節プウチャーチンが長崎に来航。

- 一八五四年（安政元年）
- 一八五六年（安政三年）
- 一八五八年（安政四年）
- 一八五九年（安政五年）
- 一八六〇年（万延元年）
- 一八六二年（文久二年）
- 一八六三年（文久三年）
- 一八六七年（慶応三年）
- 一八六八年（明治元年）
- 一八六九年（明治二年）
- 一八七〇年（明治三年）
- 一八七一年（明治四年）
- 一八七二年（明治五年）

ペリー再び来航、日米和親条約締結

日英・日露和親条約締結

アメリカ総領事ハリスが下田に着任

井伊直弼が大老。米・英・露・仏と修好通商条約締結

安政の大獄、オールロツクが初代駐日英国領事に着任

桜田門外の変

生麦事件（薩摩藩士によるイギリス人殺傷事件）

薩英戦争、英国艦艇七隻が鹿児島湾へ

「経済学批判一八六一〜一八六三草稿」執筆

大政奉還、

「資本論」第一部出版

「資本論草稿（一八六五〜六七草稿）」執筆

五箇条のご誓文、江戸城明渡、戊辰戦争

四民平等、華族・士族・平民の制を設ける

レーニン生誕

藩置県・郵便制度開始、金本位制

義務教育開始される

東京新橋から横浜の間に鉄道開通

一八八一年（明治一四年）

官営による富岡製糸場操業開始  
福沢諭吉「学問のすすめ」を著す

「資本論草稿（一八六八〜八一草稿）」執筆、  
国会開設の詔勅

板垣退助らが自由党結成

一八八三年（明治一六年）

マルクス没す。

鹿鳴館が落成する

一八八四年（明治一七年）

「群馬事件」、「秩父事件」

一八八五年（明治一八年）

「資本論」第二部出版（エンゲルス編集）

一八八九年（明治二二年）

大日本帝国憲法公布

一八九〇年（明治文敏）

世界初のメーデー、衆議院議員選挙実施、  
教育勅語発布、

一八九四年（明治二七年）

「資本論」第三部出版（エンゲルス編集）、

日清戦争

これからの日本が「絶対的天皇制」に向かつて突き進んで行くという点に関して、マルクスがどれだけの情報を手にしていたかを調べることは出来れば面白いとおもいます。「資本論」ではそれほど触れているわけではないので、引養分だけでは「マルクスが考えていたこと」がすべてわかるわけではありません。

しかし、日本について触れている場所が「絶対主義」の時代や「本源的蓄積」解明の文脈のところであるということは、当時の日本が封建制度から資本主義への移行期である絶対主義の過程にあることは認識していたのではないかという点で、非常に意味深いと感じます。マルクスにとつては、限定され、日々急速に変動する歴史の胎動を感じられる材料に不足していたと思われるのは、日本がヨーロッパから見るときわめて特殊な言語圏であるという点もあるようにも思います。

とまれ、菊池先生の言われる「小ずるい日本資本主義」の姿がどのようなものであるかは、マルクスにとっては、いまだ未明の状態ではなかったのではないでしょうか。だからこそ、「日本資本主義分析」は野呂栄太郎や山田盛太郎ら、先達によつて解き明かすことになったこと、そしてその先達らによる血のにじむような理論的解明が、山田盛太郎の「日本資本主義分析」の名著にも結実し顕れていて、いまでも生命力をもった科学的なものとして理論が生み出された必然性・継承性のようなものを強く感じます。

「資本論」に出てくる日本は、そのような意味でもおもに封建制度から資本主義へと向かい時期の、独特の姿を指摘するものと読み取れます。しかし、その博学ぶりは驚嘆にあたいすることも確かです。不破さんはその知識のもとになったであろう文献を『資本論』全三部を読む」の第三

分冊でも紹介しています。(コラム記事「マルクスの日本論とオールコック」 ヨーロッパの中世と幕末の日本イギリスの初代駐日領事兼外交代表として一八五九年に来日したラザフォード・オールコックの回想記「大君の都——幕末日本滞在記」(上・中・下 岩波文庫 一九八七年)しかし、「資料」はそれにとどまらないことは、「第一部十三章」からの引用でも明らかです。

以下、「資本論」に出てくる「日本」に関する文章を、現在判かったものだけ転記して見ました、ご参照ください。

○ 「資本論」第一部第一篇第三章 貨幣または商品流通 (新日本文庫版第一分冊237ページ)

13 「商品生産が一定の高さと広さに達すると、支払手段としての貨幣の機能は、商品流通の部面の

外におよぶようになる。貨幣は契約の一般的商品となる。地代、租税などは、現物納付から貨幣支払いに転化する。この転化が生産過程の総姿態によつてどんなに強く制約されているかは、たとえば、あらゆる公課を貨幣で取り立てようとしたローマ帝国の試みが二度にわたつて失敗したことで証明されている。ボウギューベル、ヴォパン將軍などがあのように雄弁に非難しているルイ14世治下のフランス農民の途方もない窮乏は、重税のせいだけでなく、現物税から貨幣税への転化のせいでもあった。他面、地代の形態がアジア——そこではそれが同時に国税の主要な要素である。——では自然諸関係と同じような不変性をもって再生産される生産諸関係にもとづいているとすれば、この支払形態は反作用的にこの旧来の生産形態を維持する。それは、トルコ帝国の自己維持の秘密の一つをなしている。もし、ヨーロッパによつて押しつけられた対外貿易が、日本に

において現物地代の貨幣地代への転化をもたらすならば、日本の模範的な農業もおしまいである。その狭い経済的実存条件は解消されるであろう。」

○「資本論」第一部第七編第24章いわゆる本源的蓄積（新日本新書版第4分冊P1227から始まる）第二節 農民からの土地の収奪」の最初の文章の註192として「日本」に言及しています。

（192）「日本は、その土地所有の純封建的組織とその発達した小農民経営とによって、たいていはブルジョアの先入見にとらわれているわれわれのすべての歴史書よりもはるかに忠実にヨーロッパの中世像を示してくれる。中世を犠牲にして『自由主義的』であるということは、あまりにも手前勝手すぎる。」

これは、次の本文の「註192」として書かれたものです。

#### 「第二節 農民からの土地の収奪」

イギリスでは農奴制は14世紀の終わりごろには事実上消滅していた。当時は、そして15世紀にはなおいっそう、人口の大多数が自由な自営農民——たとえ彼らの所有がどのような封建的看板によって隠蔽されていたにしても——から成り立っていた。比較的大きな領主直営地では、以前には自分自身農奴であったベイリフ（荘園の土地管理人）が自由な借地農場経営者によって駆逐されていた。農業の賃労働者は、一部分は余暇を利用して大土地所有者のもとで労働する農民から成り立っており、一部分は、自立した、相対的にも絶対的にも数少ない、本来の賃金労働者の階級から成り立っていた。後者も事実上は同時に自営農民であった。というのは、彼らは自分たちの賃金のほかに四エーカーまたはそれ以上の広さの耕地と”小屋”を割り当てられていたからである。そのうえ、彼らは本来の農民とともに共同

地の用益権を享有していて、そこでは彼らの家畜が放牧されていたし、またそれは同時に彼らの燃料になる薪や泥炭などを供給していた。(註191)ヨーロッパのどの国でも、封建的な生産は出来るだけ多くの家臣に土地を分割するということによって特徴づけられている。封建領主の権力は、どの君主の権力とも同様に、彼の地代帳の長さ(フランス語版では「財布のふくらみ」となっている)ではなく、彼の臣下の数にもとづいており、またこの臣下の数は自営農民の数にかかっていた。(註192)」

このマルクスの記述と註からは、封建制から資本主義へと至る歴史的な段階である絶対主義下の農民・農業労働者の分析が非常に深いこと、「自営農民」の経済的な分析は、山田盛太郎の著作である「日本資本主義分析」の「半封建性」分析に驚くほど正確に引き継がれていることを感じま

す。

○第一部二十三章 資本主義的蓄積の一般法則(④、p1182、)よりの部分は様々な文献の引用ですが、この内容を見ると、マルクスがオーロックだけでなくさまざまな角度から日本について記述された文書に深い関心を持っていたこと、それも単に博識ぶりを披歴するためにではなく、引用の個所と資本論のテーマの関連で読むと、資本の法則を解明する関連事項の中に日本の状況を正確に位置づけていたことを窺い知ることが出来ます。次の文章は「近代的マニユファクチャ」のなかのものです。

「第一部第四編 相対的剰余価値の生産

第十三章 機械設備と大工業

c 近代的マニユファクチュア

(③、799ページより)

もつとも下等でさげすまれ、もつとも不潔で、しかももつとも賃金の少ない労働であり、そのため好んで若い娘や婦人が使用されるのがぼろの選別である。周知の通り、大ブリテンは、自国の数えきれないほどのぼろは別にして、全世界のぼろ取引の中心地をなしている。そこへは、日本、遠い南アフリカの諸国、およびカナリア諸島からぼろが流れ込む。しかし、その主要供給源は、ドイツ、フランス、ロシア、イギリス、エジプト、トルコ、ベルギー、およびオランダである。そのぼろは、肥料、毛屑（寝具用の）、シヨディ（再生羊毛）の製造に使われ、また紙の原料として役立つ。ぼろ選別女工は、天然痘やその他の伝染病をまきちらす媒介者の役目をし、彼女たち自身が、その最初の犠牲者である。過度労働、困難で不適當な労働、その結果、子供のときからこき使われ

○「第1部第7編資本の蓄積過程 23章 資本主義的蓄積の一般法則（④、p1182）、より

P1176

ハンター医師は、純農業地域ばかりでなくイングランドの全州において、537戸の農業労働者の”小屋”を調査した、……、

ここに12州の実例を選んで述べておこう。

（1176〜1182ページ）

（1） ペッドフォードシャー

（2） バークシャー

（3） バッキンガムシャー

（4） ケンブリッジシャー

（5） エセックス

（6） ヘリフォードシャー

（7） ハンティングドシャー

ハートフォードでは、1851年には85戸の家屋があつたが、その後まもなく、1720エーカー



「この小さい教区で19戸が取りこわされた。居住者は、1831年には341人であった。寝室一つの“小屋”が14戸調査された。その一戸には、一夫婦、年頃の息子三人、年頃の娘一人、子供四人、合わせて10人が住んでいた。もう一戸には大人三人と子供六人が住んでいた。……、日本では生活諸条件の循環はもつと清潔に行われている。」

ほかにも第三部で日本についてふれている箇所を見つけました。

それぞれ、いずれも意味があり、後の日本の科学的分析の方向性へもなかなか深い示唆を与えてくれているように感じました。

機会があれば「前橋資本論講座」でも討論してみたい問題です。」

\* 結そして続く

「資本論」や「資本論草稿集」は、読めば読むほど、学べば学ぶほどその深みが増してくる。

『「資本論」に取り組んでいる』というところ、結構「奇異のまなざし」が向けられることがある。

「そんな、古いものを読まなくても、現在の経済問題の論文を読んだほうがいい」と言いたいのが見て取れる。また、「マルクスが書いた社会主義の設計図はまちがっていたのではないか。今更それを読んでどうするのか」という意見も結構多い。しかし、はたしてそうであろうか。

「資本論」だけでなく、マルクスの残した膨大なメモのなかで「資本論草稿集」という形で出版されたものを読み始めると、いかに自己流きかたが痛いほどわかってくる。

○ 「資本主義社会」を科学的に分析する神髄はどこにあるかということの把握

○ どうして「その結論」が出たのか、という科学的論証方法の把握。その中に現在の問題を

深く分析するヒントをつかむこと、などの問題意識が肝要ではないか。等。

いずれにしても、「現代資本主義」に、随所であふれでている末期症状は、かつてマルクスが分析した資本主義と驚くほど酷似している。それによつてどのように立ち向かうかというこの根本問題をつかむということは、「古典を読む」というような次元をはるかに超える現代的課題である気がする。「資本論学習運動」を広めたい所以である。